

『紡ぎ・紡ぎあう 心と心』

～ わかってもらえる安心感 ～

発表者 早野弥生 宮崎智子 薫森香織 (いづみ中央幼稚園)
共同研究者 今村光章 (岐阜大学)

■ 研究の内容 ■

【 研究課題（テーマ）について 】

私たちは、研究課題 『 紡ぎ・紡ぎあう 心と心 ～ わかってもらえる安心感 ～ 』を設定し、子どもたちの心に秘められた思いや、気持ちの揺れ動きを大切に受け止め、言葉や態度として表現するに至るまでの過程に、丁寧に寄り添いたいという願いからこの研究課題に取り組んでいる。

子どもたちとの生活は、寄り合わされた糸のように、心を通わせ合い、心を紡ぎながら日々営まれている。子どもたちの豊かな感性に微笑ましい光景が日々見られる中、自分の思いを上手く表現できなくて、嬉しい・楽しい・悲しい・悔しい・・・等々、様々な感情の中で思いが交錯し、子どもたちは、心を紡ぎ、紡ぎあっている。ある一定の方向へ思いを誘導するのではなく、様々な感情の狭間で揺れ動く気持ちに寄り添い、そして保育者もまた一緒に心を揺らしながら生活を紡いでいきたいと思っている。そして、言葉にならない思いを受け止めた、その紡ぎの先に、生まれ抱かれる気持ちに着目しながら、研究を深めたい。

これまで園内研究会において、各年齢毎に子どもたちの生活を振り返り、エピソードを出し合って話し合いをしてきた。研究会のご指導に来てくださっていた、岐阜大学教育学部、准教授の今村光章先生が、私たちの話し合いを、子どもの成長過程や各学年の話題に合わせて、

3歳児 → 受け止める(安心感) 4歳児 → 認める(自尊感情) 5歳児 → 寄り添う(共感力)

と、分かりやすくまとめてくださり、話し合いを深めていく上での大切な視点となった。

【 研究の方法 】

共同研究者としてご指導頂いている岐阜大学教育学部、准教授の今村光章先生に、園内研究会においてご助言を頂きながら、保育者間での様々な思いを出し合い、研究を深めたいという願いから、エピソード記述法を用いて研究を進めることとした。

ここでいう、エピソードとは、

- ① 背景 : 出来事の状態を知るための、それまでの状況が客観的に書かれたもの
- ② エピソード : 「あるがまま」※1、その時の書き手（保育者）の思いを込めて書かれたもの
- ③ 省察 : エピソードを省みて、感じたことなどが主観的 ※2 に書かれたもの

の、3つの要素から構成されるものである。

※1 あるがまま : 「今・ここ」そこにあるがままの様子

※2 主観的 : 自分自身の感じていることを自分の立場で

● エピソード記述の様式の補足説明

- ◆ 名前は、全て仮名である。「くん」は、男児に、「さん」は、女児につけた。
- ◆ 当人であることを特定されないように十分に配慮して、事実関係には全く関係のないところで、内容を改変している場合がある。しかし、エピソードとしての本質は失っていない。

【 研究の内容 】

◆ エピソードの収集と、その読み取り

全職員がエピソードを持ち寄り、お互いに読み合ってきた。その中で、一つひとつのエピソードを丁寧に読みとり、そこに至るまでの背景や生活環境等も踏まえて、一人ひとりの保育者が、エピソードにまつわる、子どもたちや保育者から発せられた言葉の意味や思いを、どのように受け止めて、その子どもの育ちを感じ取っていくかを、園内の研究会を通して学んでいった。今回紹介するエピソードは、その中で、時間をかけて、全職員で読みとりを深めていったものである。

◆ エピソードから学ぶ、子どもの育ちや子どもへの関わり

今回の研究では、子どもの育ちを考えるための視点として、受け止める（安心感）・認める（自尊感情）・寄り添う（共感力）という3つのキーワードが、3年間を通して、育ちの連続性を感じる上での柱となっている。一つひとつが、単独で湧き起こるものではなく、それまでの生活の中で育まれてきたことが、気持ちの変容として揺れ動き、言葉となって表出していることを感じていった。

「絆」 ～ 心と心を紡ぐ生活 ～

3歳児 佐藤 まな (仮名・女兒)
佐藤 かな (仮名・女兒)

■ 背景 ■

まなさん、かなさんは双子の姉妹である。父、母、弟の5人で暮らしている。

3年程前に栃木県より岐阜に来たため、保護者もあまり近所の人と接する機会も少なく、入園前は、あまり同年齢の子との積極的な関わりを持つことがほとんどなかった。そのため、同年齢の子と一緒に日常生活をしていくのは、初めての経験であったため、入園当初は、2人ともとても緊張しており、2人であることがとても落ち着くようであった。

① 4月17日(火) * 晴れ *

ぎゅつ。 思いがちょっと通じた瞬間

■ エピソード ■

緊張しているせいか、とても無表情のふたり。片時も離れず、すぐ近くにいて、手を繋いでいる。そんな2人に、リラックスして欲しいと思い、沢山話しかけるが、じっとこちらを見つめているだけで、何も答えない。頷いたり、首を振ったりもしないため、話したことを理解してくれているのかすら分からない。

だが、じっと見つめてくれるので、沢山話しかけてみた。やはり、見つめているだけである。帰りがけ、「さようなら」とハグをしようとする、ぐっと首を横に反った。きつと嫌なんだ！と思い、ハグをするのをやめた。

しかし、言葉で伝えられない分、体でのコミュニケーションを取りたいと思い、手を握ることにした。まず、かなさんに手を差し出してみた。すると、「嫌だ！」と言うかのように、手を遠ざけ、ギュッと力を強めた。そこで、まなさんに手を出してみた。すると、私の手をじっと見つめた後、ゆっくりと手を差し出した。初めて触れてくれたことに、私もとても嬉しくなり、ギュッと抱きしめたい気持ちに堪えながら、「さようなら」と笑顔で言った。そして、その後すぐにかなさんにもう一度、手を差し出して

みた。すると、今度はサッと手を差し出してくれた。

手をぎゅつと握りながら、また「さようなら」と私は目を見て言った。なんだか少し表情がゆるんだ気がした。そして、二人でギュッと手をつなぎ、バスに乗り込んでいった。

■ 省察 ■

とても無表情なふたり。何を思っているのだろうか？この表情がいつか、満面の笑みで充ち溢れてくれたたらいいな、と今日の関わりを通じて感じた。私が手を差し出したときのかなさんの表情は警戒心でいっぱいであった様に思う。しかし、初めて手と手を握った瞬間、その手から、私は温かさを感じた。繋がれた手から感じたぬくもりによって、私自身の気持ちも高まり、嬉しさが込みあげてきた。そのときの2人にも、私の嬉しさが抑えきれないこの気持ちを、表情や姿から感じ取ってくれたのではないだろうか。そして、手を差し出してくれた時の2人は、どんな気持ちだったのだろうか。手を握り、「さようなら」と声をかけ、表情がほんの少しゆるんだのを目にした時、気持ちがちょっと通い合ったのを感じた。今後も、心で感じ、全身で思いを受け止めていき、気持ちを通い合わせていけたらと思っている。



② 5月10(木) * 晴れ *

やったー！ 一緒に遊べた！！

■ エピソード ■

いつもみんなが外遊びをしていると、保育室に戻ってしまったり、外に立ってみんなの様子を見ている2人。園生活にも、少しずつ慣れ、2人で何やら話をしていたり、追いかっこをして遊んでいる姿を、よく目にしていたので、「すべり台一緒にやろう！」と誘ってみた。すると、いつもであったら、遊びに誘うとこちらをちらっと見た後、2人で違うところに行ってしまうたり、近くにきてくれても、

みんなの様子を見ているだけであった。しかし、今日は手をつないでくれ、一緒に滑り台のところまで来ることができた。まず、すべり台に私が乗り、滑ってみた。それをじっと見つめるふたり。まだ手を繋いでいる。「楽しかった～！一緒にやろう！」とまなさんの手を取ると、階段を上りだす。まなさんを見て、動きだすかなさん。初めて一緒にすべり台を滑ることができた。その後、何度か登ったり、滑ったりを繰り返し楽しんでいた。

■ 省 察 ■

初めて一緒に同じ遊びを行うことができ、とても嬉しかった。今まで、たくさん声をかけたり、関わってきたことで、私に対して心を開き始めたのかなと感じる。今まで2人で遊ぶことがほとんどであったが、そこに私が加わったことで、2人で行うことができなかった遊びも体験出来たことが良かったように思う。だから、その時、私は、私自身が

一緒にすべり台を滑りながら、一緒に遊べたことの嬉しさを全身で伝えていった。きっと、その嬉しさを2人も心で受け止めてくれたので、先生と一緒に遊ぶことができた嬉しさを感じ、より一層、私と2人の心がぐっと近くなったのではないかと感じる。滑り終わった時の2人の表情が、私にはとても嬉しそうに見えた。



③ 6月13日(水) * 曇り *

ぎゅっ✌️。 心で繋がった“手と手”

■ エピソード ■

お昼寝の時間になり、その日はまなさんとかなさんの布団を離して敷いた。それぞれ自分の布団の所に行き、すぐに横になる。まなさんの横には、りこさん(仮名)。すると、りこさんがまなさんに手を差し出し、まなさんもその手を取った。ギュッと握っている。りこさんの方をじっと見つめ、手を握ったまま、離さない。それを見て、りこさんもまなさんを見つめ、嬉しそうな笑顔になる。手はじっとして動かない。そのうちまなさんは眠ってしまったが、手はギュッと繋がれたままであった。

■ 省 察 ■

ともだちとギュッと繋がれた手。そこから、同じクラスの友達に対して、少しずつ心を寄せ始めていることを感じた。つないだ瞬間、何も言葉はなかった。しかし、今まで私や他の保育者と沢山接した経験、また、この繋がれた手の温かさから、友だちとの心が、少しずつ近くなって、心と心が触れ合い始めたんだと感じた。いつも私たちは言葉で会話し、言葉で思いを伝えているが、この2人の姿を見たとき、心と心の通い合いが、心を温かくしてくれるのだということを実感した。何も言わず、繋がれたその手を見た時、なんだかとても私の心も温かくなった。言葉では伝えきれないものが、その子の表情や行動に溢れている。その思いをしっかりと私も心で感じていきたいと思った。



④ 6月21日(木) * 晴れ *

“ハートがいいな…” 先生ちゃんと分かったよ

■ エピソード ■

給食で、いつも食パンとジャムの時には、一人ひとりジャムでパンに絵を描いている。今日もいつものように順番に子ども達のリクエストされた絵を描いてまわっていた。2人は、いつも「何がいい？」と聞いても、なかなか自分の思いを伝えてくれることはなかった。だから私は、隣の子をじっと見つめている様子を見て、その子と同じ絵にするなどしていた。今日もきっと・・・という思いの中、かなさんの番になった。

すると、今日は何と、食パンの上で、手でハートを作っている。その光景がとっても可愛く、「分かった！ハートだね」と言い、とびきり大きなハートを描いて、手渡した。すると少し照れくさそうな表情で、それを受け取った。

■ 省 察 ■

今回、手でハートを作り、こんなにも思いを伝えようとしている姿を目にした時に、かなさんの「先生、わかって！」という気持ちが、私の心に強く伝わり、とても感動した。

それまでの2人の姿を思い出した時、きっと今までも、思いを伝えようと、私にたくさんのサインを送ってくれていたのではないかと改めて気づかされた。今、かなさんは、自分なりの思いをジェスチャーで、必死に伝えようとしてくれている。だから、私もこれまで以上に、些細な事にも目を向け、この子たちの気持ちを心でしっかりと受け止め、分かていきたいという思いが強くなった。

また、この人なら分かってくれるだろうという思いが、表現し、伝える意欲に、きっと繋がるのではないかと思うので、そんな関係を、これからもしっかりと築いていきたいと思った。

⑤ 6月27(水) *くもり* 「ありがとう！」 差し出した手から感じた優しさ

■ エピソード ■

帰りの会の後、さようならをして、保育室を出るまなさんとかなさん。その日は、お昼寝後、寂しくなってしまったのか、かなさんが涙を流していたため、別々に部屋を出た二人。

涙は止まったものの、泣いていたかなさんを気遣うまなさん。まなさんがかなさんに手を差し出したが、その手を取らなかった。そしてかなさんは、その様子を近くで見ていた私の所へ来て、ギュッとエプロンの裾を握った。そこで私はかなさんの手をぎゅっと握った。その様子を見たまなさんは、少し安心したような表情をし、靴を履くところに歩き始めた。

少し歩くと、ゆきこさん(仮名)が靴を持ったまま、何か訴えかけるような表情で立っていた。

私は「ゆきちゃん、どうしたの？」と声をかけた。何も答えないゆきこさんをじっと見つめたあと、急にまなさんがゆきこさんに向かって手を差し出した。

■ 省 察 ■

友だちに自分から手を差し出したまなさんの姿に私は驚いた。かなさんが私と手をつないだことで、少し落ち着くことができたことを目にしたすぐ後であったことから、このような行動が見られたのではないかなと思った。まなさんの行動にとっても嬉しかった私は、「まなちゃん、優しかったね！ありがとう」と伝えた。

この時、もっとその後のまなさんの行動を観察し、声をかけていきたかったのだが、他の用事でその場を離れてしまったが心残りであった。



⑥ 7月6日(金) *くもり* “わたしが かな だよ！！” トイレットペーパー事件

■ エピソード ■

まなさんがトイレに行きたいと伝えてくれたため、かなさんにも「一緒に行く？」と尋ねると、コクリと頷いたので、3人でトイレに行くことにした。

まずまなさんがトイレに入った。しかし、私は顔のとてもよく似ている二人なので、見間違え、かなさんが先に入ったものだと思っていた。上手にできるかな？と見守っていると、トイレットペーパーをクルクルと取り過ぎている。そこで私は「かなちゃん、トイレットペーパー取り過ぎだよ！」と声をかけた。声をかけた後、パッと横を見ると、まなさんだと思っていたかなさんが、着ていたスモックを間くりあげ、何やら一生懸命自分の胸に指をさしている。私は、何をしてるんだろう？と一瞬戸惑ったが、指の先に目をやると、“さとう かな”と書いてあった。その時、私は名前を間違えてしまっていたのに気づいた。「ごめんね！まなちゃん！かなちゃん！先生、間違えてたね。」と謝った。自分の伝えたいことが伝わったのが嬉しかったのか、かなさんは少し嬉しそうな表情をしていた。

■ 省 察 ■

「かなは私だよ！」と必死で伝えようとしているかなさんの姿に、とても愛おしさを感じた。

私に対して、自分という存在を「伝えたい」「気づいてほしい」と、必死になっている姿に驚きと感動でいっぱいになった。

4月からの私とのかかわりの中で、少しずつ心を寄せて関係を深めていくことができたからこそ、自分のことを受け止めてほしい、分かってほしいという気持ちを、このような形で表現してくれたのではないかと感じた。些細な出来事ではあったが、そのような小さな出来事も丁寧に見守り、思いを汲み取っていけるようにしていきたい。



※ 本冊子の写真掲載については、本人・保護者の同意を得ています。但し、写真の転写等、他への引用はお控えください。

■ エピソード ■

朝、幼稚園に登園し、いつものように 保育室に入ってきたまなさんとかなさん。いつもであれば、すぐにロッカーの前に行くふたりであったが、今日は鞆を持ったまま、かなさんが私のところに来てきた。どうしたのかな？と思いながらも「かなちゃん、おはよう！」と挨拶した。すると、かなさんが鞆から袋を取り出し、私に見せてくれた。中を見てみると、中にはたくさんの紙が入っていた。

それを見た時、先日かなさんがゆみさん(仮名)や、みりさん(仮名)からお手紙をもらい、嬉しそうに私に見せに来てくれたことを思い出した。

「かなちゃん！もしかして、みんなにプレゼント持ってきてくれたの？」と私は聞いてみた。かなさんはコクリと頷いた。「ありがとう！きっとみんな喜ぶね！」と話していると、そんな私とかなさんの様子を見ていたのか、まなさんも近くにやって来て、私にかなさんが持っていたのと同じように、袋に入っているたくさんのプレゼントを見せてくれた。「あれ？まなちゃんもプレゼント持ってきてくれたんだね！」と言うと、まなさんもコクリと頷いた。「じゃあ、今日のお楽しみが終わって、ご飯食べ終わったら、みんなにあげようね。それまではみんなには秘密にしよう！大事にお鞆にしまっておいてね！」と私が言うと、鞆を片付け、身支度を済ませに行った。

給食が終わり、クラスのみんなに、シートに座るよう声をかけた。そしてかなさんとまなさんに、前に来るよう声をかけた。来てくれるかな…と思いながらも、私は前に立ったまま二人の様子を見守っていた。すると、ふたりで一緒にゆっくりと立ち上がり、前に来てくれた。二人が前に来たところで、「今日はね、まなちゃんとかなちゃんが みんなにプレゼント持ってきてくれたんだって！嬉しいね！今から、二人がみんなのところにプレゼントを持っていってくれるから、もらった お友達は、“ありがとう”のグーをしてあげてね」と伝えた。わくわくしている、れんげ組の子ども達。「じゃあ、まなちゃん、かなちゃん！お友達にあげてこようか！」と私が言うと、ゆっくりと友だちのそばに近づいていった。

まなさんとかなさんを取り囲むように、れんげ組の子ども達も二人に近づいた。一人一人に持ってきたプレゼントを手渡していく。そして「ありがとう」と言ってハグをされているふたり。

やはり、緊張しているのか、表情は少し硬い。それでも、みんなにプレゼントを配っていた。そんな中、しゅんくん(仮名)は少し離れた所で、みんなの様子を見ており、まだプレゼントをもらっていないかった。そこで私は、近くにいたまなさんに「まなちゃん！しゅんくんが、まだもらっていないみたいだよ！」とこっそり声をかけた。

すると、まなさんがしゅんくんの方に行き、「はい、どうぞ！」と言うかのように、袋から1つ取って、しゅんくんの方に差し出した。すると、しゅんくんは恥ずかしくなってしまったのか「ぶー」と言いながら、ドアの方に行き、反対を向いてしまった。まなさんを見ると、少し困っているようであったが、渡そうとしていた紙をギュッと握っている。私は「しゅんくん！まなちゃん、しゅんくんにもプレゼントあるんだって！」と声をかけた。何度か声をかけたが、しゅんくんは、また「ぶー」と言ってこちらを向いてくれない。もう一度、「しゅんくん！」と私が声をかけようとした。すると、まなさんがほんの少し、しゅんくに近づいた。そして、持っていた紙をしゅんくんから、ほんの少し離れたところに、そっと置いた。そして、またみんなが集まっている輪の方に戻っていった。

■ 省 察 ■

まなさんとかなさんが「みんなにあげたい！」とプレゼントを持ってきてくれたことに、とても驚いたと共に、そのような気持ちを持ってくれたことに、とても嬉しくなった。友達から受けたことを、このようにすぐに返してあげたことは、きっと家庭でも、友だちからももらった事の嬉しさを二人と一緒に喜び、しっかりと気持ちを受け止めてくださっていたからなのかな…と思った。プレゼントを作っているときのやりとりや二人の様子を、その時にもっと保護者に聞いていけると良かったと、今、反省している。

そして一番驚いたのは、まなさんのしゅんくんに対するかわりであった。私は、まなさんの気持ちをとても強く感じていたため、しゅんくんに対して“まなさんの気持ちを、しゅんくんにも感じてほしい、受けとめてほしい！”と願いが強く出てしまっていた。

しかし、まなさんは違った。すぐ近くには行かず、少し離れたところに置いた。本当の所は定かではないが、きっとまなさんが、今まで自分が感じてきたこと、自分が経験してきたことと重ね合わせ、しゅんくんの恥ずかしいような、照れくさいような気持ちを感じて、そうしてくれたのではないかと思った。しゅんくんの気持ちを紡いでいるまなさんの姿や、気持ちを感じた時、自分自身がついつい直接的な関わりを求めてしまっている事にハッとさせられた。今回のまなさんの姿から、自分自身の関わりを省みる、とても良い機会となった。

p s その後のしゅんくん

そっとまなさんがおいてくれたプレゼントを、その後も、しゅんくんは手に取らなかった。私が通園鞆にそっと入れ、それを帰りがけしゅんくに伝えた。

そして何日かして、しゅんくんがまなさんにももらったように、私にプレゼントを持ってきてくれた。まなさんの気持ちをしゅんくんも感じてくれていたのかな…と嬉しくなった。

■ エピソード ■

朝の出席を取っているとき、入園してから今まで、まだ一回も名前を呼び、それに応えてくれる姿は見られていない。そのため、名前を呼んだ後、近くまで行き「はい」と手を挙げて、一緒にお返事するということを、繰り返し行ってきた。声を出して、返事をしなくてもいい、まずは、名前を呼んだ時に、何かしらの“反応をしてくれたらいいな”という願いで関わってきた。

私は「今日はどうかな・・・？やっぱりまだ難しいかな？」という気持ちを心の中に持ちながら、「さとう かなさーん」と呼んだ。すると、こちらをじっと見ながら、ゆっくりと手を胸の前に挙げた。私の中で一瞬、時が止まった。手を挙げ、答えてくれたという事実、嬉しさが込みあげてきた。そして、気がつくと、かなさんを強く抱きしめていた。「すごいね！かなちゃん、今お返事してくれたね」と言うと、少し照れくさそうにしているかなさん。高まる気持ちを押さえながら、今度は「さとう まなさーん！」と呼んだ。すると、まなさんもゆっくりと手を挙げてくれた。それを見て、私はまた気持ちが高まり、「すごい、すごい」と言いながら、まなさんも抱きしめた。そんな私を見て、りょうすけくん(仮名)も席を立ち「今、かなちゃんとまなちゃん、手挙げたね。すごかったね！」と一緒に喜んでくれた。クラスの他の子ども達も、一緒になって喜び、クラスがとても温かい雰囲気になったのを感じた。全員の名前が呼び終わり、活動の準備をし始め、みんなが席を立った。

りょうすけくんがかなさんに話しかけていた。ニコリ笑いながら「かなちゃん、手挙げれたね！」と言った。そんなりょうすけくんを、かなさんも少し照れながら見つめていた。

■ 省 察 ■

初めてのお返事に、私自身も大興奮だった。

こんなにも自然にお返事してくれたことに、喜びでいっぱいであった。「ちゃんとお返事してね！」と言ってしまっていたら、きっとこのような姿は見られなかったかもしれないと思う。

正直、「何でお返事してくれないんだろう？」「はい！の一言なんだけどな…」と焦ったり、口から言葉が出てしまいそうになった事はたくさんある。でも、今日、かなさんとまなさんの姿を見て、“焦らなくてよかった”“待ち続けて良かった”と思った。今まで私は、子どもたちとの関係の中で、「言葉」ととらわれ過ぎてしまっていたのではないかと感じている。言葉がなくても、心を通い合わせようとしているその行動・姿に、しっかりと向き合い、受け止めていこうとする事で、言葉にならない溢れる思いを、十分に心で感じていくことができるのだと実感している。

今回かなさん、まなさんが自分のタイミングで、“自分”を表現することができたことに、その意味の大きさをを感じる。りょうすけくんが、友だちの頑張った姿や思いに共感し、喜んでくれた姿に心を打たれた。そして、年少児でも、こんな風に友達に寄り添うことができるんだと、とても驚いた。また、2人のことをクラスの子も達が、こんなにも理解してくれていたという事がとても嬉しく、そんな頑張った出来事を、クラスみんなで喜べたことにとても感動した。

そんな中で過ごしているから、今、まなさん、かなさんの姿も、少しずつ変化してきているのかもしれない。2人にとって、安心できる環境が幼稚園の中でも出来てきていることに、嬉しさを感じる。



■ 背景 ■

かなさん(3歳10か月)とまなさん(3歳10か月)は4月当初、ナフキンの用意はするものの、給食に対し、あまり興味を示さず、好きなものを食べ終えてしまうと、蓋をしめ、いつの間にか片付けてしまっていることが多かった。また二人が隣の席でないと、「二人一緒になければ嫌だ」と言うかのように、私の方を見つめ、無言の訴えがあった。

まずは安心して過ごしてほしいという思いがあったため、ふたりで座り、食べることができる環境を作り、見守っていった。しかし、ふたりで食べているため、やはりペースは一緒に、どちらかが片付け始めると、もう片方も一緒に、片付けてしまうことが多く見られた。

ある時、グループ決めを行い、まなさんとかなさんは違うグループになり、席も離れた。それが良いきっかけとなり、それぞれが自分のペースで食べることができるようになった。少しでも色々なものに挑戦してほしいという願いのもと、実際に私が食べて見せたり、楽しく食事できる

■ エピソード ■

いつものように給食の時間になると、まなさんがナフキンを見せに来た。「かわいいね！今日はキティちゃんなの？」と声をかけると、コクリと頷き、満足したように席に戻っていった。そして、少し経ってかなさんがやってきて、私の前でナフキンを広げた。「今日も可愛いのだね！」と声をかけると、かなさんも満足したように、席に戻っていった。

給食(お弁当給食)を配り、「いただきます」をして、みんなが食べ始めた。かなさん、まなさんも食べ始める。しかし、食べられるものだけ食べてしまうと、ふたりとも手が止まってしまっていた。「昨日はかなさんが完食出来たけど、今日はどうだろう…。」そんな気持ちを持ちながら、私はかなさん、まなさんの間のグループで、一緒にご飯を食べながら見守っていた。次々にみんなが食べ終わり、私は机を回りながら、食べられない子のお減らしをしていた。食べ終えた子たちは、次々に玩具で遊び始めた。私は「食べれない」と言っているものを一口だけ食べられるようみんなに声をかけたり、口まで添えるなど援助をしていた。まなさんの席に着いた。「まなちゃん！食べれないものある？」と声をかけ、お弁当を取ろうとした。すると、まなさんは弁当箱をギュッと握り、胸に抱えた。その強い様子に驚き、私は「まなちゃん、頑張って食べれるの？」と聞いた。頷き、給食を大きな口で食べ始めた。そこで、私は今日はまなさんの強い気持ちを受け止め、応援したいと思い、見守ることにした。

しかし、時間はもう13時近く。今、準備しな

雰囲気を作った。そして、少しでも食べることができた時には、たくさん褒め、頑張りを認めていった。すると、少しずつ食べてみようという気持ちを持つことができるようになり、自ら挑戦しようとする姿がたくさん見られるようになってきた。その頃から、給食の用意になると、ナフキンを持って、私のところにやってきて、「見て！かわいいでしょ？」と言うかのように、毎日ナフキンを見せに来てくれるようになった。そして、それがふたりの日課となり、毎日そんな「見てほしい」という気持ちを受け止めていったことで、「食べてみよう！」という気持ちが「頑張って食べたい！」という気持ちの変化が見られた。かなさんが「絶対食べるんだ」という気持ちを強く表現し、完食することができた日。そんな頑張りを、私と高木先生、2人の先生で沢山認め、嬉しさを共感していった。そんな様子をまなさんがすこし羨ましそうな、悔しいような表情で見つめていた。そんなことがあった次の日の出来事である。

ければ、クラスの他の子のお昼寝ができなくなってしまうという思いから、私は保育室の前にある配膳用の机に、椅子を用意し、食べることができる環境を作った。そこへ、まなさんに移動してもらった。そして、私はお昼寝の用意をし始めた。まなさんは、食べたり、手を休めたりを繰り返しながら、食べていた。みんなが寝始めた。かなさんもまなさんの様子を少し気にしているようであったが、横になると、すぐに眠ってしまった。私はクラスの子をトントンとリズムをとりながら、眠りに誘いながらも、やはりまなさんの様子が気になっていた。「もう、時間も長くなり過ぎているし、お減らししてあげた方がいいのかな…」そんなことを思っていた時、急にまなさんが立ち上がり、お弁当を持って、小走りでやってきたのである。そして、強い瞳で私にお弁当を差し出した。中を見ると、お弁当の中は空っぽ。

「まなちゃん！すごい！全部食べれたんだね！がんばったね」と声をかけ、抱きしめた。

眼はきらきらと輝き、「私、頑張って食べたよ！最後まで頑張れたんだよ！」と言っているようであった。私が手を離すと、軽やかな足取りで、片付けをし、お昼寝の布団にもぐっていった。

省 察

今回、自分のお弁当箱をギュッとつかみ離さないまなさんの姿から、思いの強さを感じた。こんなにも自分の思いを強く表現してくれたことは、初めてであった。背景でも述べたように、昨日のまなさんの姿を思い出したとき、羨ましいような、悔しいような表情で、かなさんを見つめていた。かなさんに負けたくない！という気持ちからか「絶対全部食べる」という気持ちが、心の中に強くあったのだろうと思われる。しかし私自身、他の子がお昼寝をしている時まで、お給食を食べているまなさんの姿を見た時、本当にこれでいいのかな。頑張りたいという気持ちをそのまま受け止めてしまって、良かったのかな。

などと自分自身に自問自答していた。しかし、暗がりの中、空っぽになったお弁当箱を見せに来てくれた、まなさんの眼を見た時、思いを受け止め、見守ってきてよかった！と心からそう思った。キラッと輝くまなさんの眼からは「せんせい！みて！」という嬉しさが溢れ出しているように感じた。そんな頑張ったことを、私も眼と眼を合わせ、喜びを共感することができた。眼があった瞬間、まなさんと私の中では、何とも言葉では言い表せない会話をしたような気がした。

9つのエピソードをふりかえって

4月からの4ヶ月間を振り返り、この2人の子どもとじっくり関わっていく中で、自分自身が今まで、いかに「言葉」も含め、目に見える反応を求めてしまっていたのかということに、気づき反省することができた。日常生活には、ほんの些細な出来事にこそ、その子なりのたくさんの思いが溢れ、一つ一つ行動・しぐさに、言葉では言いあらわせない大きな思いが詰まっている。そんなことを、感じさせてもらった。

だからこそ、これからも、この子たちと一緒に様々な思いに寄り添い合い、気持ちを分け合っていくことの積み重ねを、大切に紡いでいきたいと、今改めて実感している。





『くやしい涙』

～ 「だってわかったもん」 ～

5歳児 鈴木 ゆう（仮名・女兒）
加藤 あい（仮名・女兒）

■ 背 景 ■

ゆうさん

ゆうさんは、恥ずかしがり屋な性格で、自分の思いを持っているものの、それを言葉で表現する事を苦手としていた。ゆうさんは、年長児になり、一つ一つの活動に対して、意欲的に取り組み、頑張ろうとする 気持ちが強く感じられている。年中児の時から、仲の良かった友だちと同じクラスになり、のびのびと生活する姿は見られたが、まだまだ自分の思いを、うまく表現することができず、友だちに頼ってしまうことが多かった。そんな中、私と母親は、いろいろな場面を通して、一歩踏み込む勇氣を持ってほしいと願っていた。

ゆうさんには、2つ歳の離れた姉がいる。普段から姉に対し、憧れをもつ姿が見られた。ゆうさんが年少の時、姉は発表会でマリンバの楽器奏者選ばれ、姉がマリンバを一生懸命演奏する姿を、間近でキラキラとした表情で見つめていた。その時からゆうさんは、マリンバに憧れ、自分もいつかやってみたいという気持ちがあったと思われる。友だちとの会話の中にも「マリンバやってみたい！！」と話す姿から、その楽器に対する思いの強さが感じられた。

あいさん

あいさんは、本来、活発な性格であるが、何かをする時、どこことなく自信なさげであったり、人前に立つと、自分の思いを言えなくなる場面が多くみられた。あいさんが何事にも一生懸命取り組む姿や、挑戦しようとする姿を、私は、出来るだけ温かく見守っていった。頑張る、ありのままのあいさんの姿を認める言葉を掛けたり、その頑張りをクラスの友だちにも伝えたりして、時には自らが発表できる場も作ってきたが、クラスの友だちの前に立つと、なかなか言葉が出ない時もあった。その時は、あいさんと一緒に言葉を出し、安心できる環境を作っていた。

年中の発表会の表現遊びでは、鬼の役になりきる、あいさんの姿をクラスの友だちが、「あいちゃんすごい！！ほんとうのオニみたい！」「あいちゃん頑張っているよね！」と、温かく受け止め認めてくれる姿が見られた。あいさんは、私や友だちからの認め言葉、応援の言葉、そして何より皆に温かく受け止めてもらった事で、クラスが安心できる居場所になり、徐々に自分に自信を持つ事ができたと共に、自分の思いをのびのびと表現する事ができるようになったと感じた。

* * * * *

■ エピソード ■

学年で楽器遊びを行った時に、年長児になって初めて使う楽器の名前を、ゆうさんに聞いてみた。

なぜ、ゆうさんに聞いたかという、背景でも述べたように、ゆうさんはマリンバに憧れ、やってみたいという気持ちがあった事を知っていたからである。そして、恥ずかしがり屋な性格で、なかなか自分の気持ちを表現する事ができずにいるゆうさんに少しでも自信につながるような経験をさせてあげたいという願いがあったからである。しかし、学年という多人数の前である事から、上手く話せないのではという予測もしていた。

ゆうさんは、質問に対して、皆に話そうとして立ち上がったが、やはりなかなか言葉は出てこなかった。そして、私はゆうさんの気持ちに間近で寄り添いたかったのと、学年のみんなにも、ゆうさんの姿（気持ち）を受け止めてほしいと思ったので、「ゆうちゃん、おいで」と手招きをして前に呼んだ。すると、ゆうさんは、私の呼びかけに応じ、スムーズに歩いては来たのだが、その後、

涙を流して何も言えなくなってしまった。

ゆうさんの肩に手を置くと、心臓の音が手に伝わり大粒の涙がこぼれ落ちた。その時私には、ゆうさんの緊張してどうにもならない思いが伝わってきた。

私は、ゆうさんの話したい思いが言葉にならない気持ちと、ゆうさんが涙で自分の思いを一生懸命に表現しようとしている姿を、学年の仲間に、どうしても受け止めてほしいと思い、「ゆうさんの涙ってどんな涙だと思う？」と、子どもたちに問いかけてみた。

「悲しい涙」「嬉しい涙」・・・

と、様々な言葉が飛び交った。そして、少し静まり一瞬間がたった時、一人の女の子が「くやしい涙」と答えた。それが、あいさんであった。

私は、あいさんの「くやしい涙」という言葉を聞いて、正直とても驚いた。年中から年長にかけて、自分の思いをのびのびと表現できるようになったあいさんの姿は感じていたが、まさか、学年の前、

そしてこのような場の中で、友だちの気持ちに寄り添い、自分の考えを発言するという事を考えてもいなかったからである。しかし、あいさんの真剣な眼差し、緊張しながらも自分の思いを精一杯伝えるその姿に、私は心が熱くなった。そして、私はあいさんに、なぜ「くやしい涙」と思ったのか、問いかけてみた。すると、ほんの少し考えた後に「本当はお話がしたいけどドキドキしてしまってお話できなくなっちゃうからくやしいと思う」と、真顔で伝えてくれた。

* * * * *

省 察

今回、ゆうさんとあいさんという二人の子の、思いと言葉を通したかわりから、二人の経験による心の育ちの違いを強く感じると共に、そこで紡ぎあう思いや言葉の大切さを深く考えることが出来た。

* * * * *

あいさんから出た「くやしい涙」という言葉に、これまで、あいさん自身が『人前に立つと緊張してお話ができなくなってしまう』という、同じ経験、同じ思いをしてきたからこそ、ゆうさんの悔しさに共感することが出来、自分の言葉で伝えてくれる事ができたのではないかと感じた。あの時、子どもたちに向けて問いかけた「どんな涙だと思う？」という言葉に対して、素直に自分の経験を振り返り、ゆうさんの思いを理解し、寄り添う事ができた、あいさんの育ちに、私はとても感動した。

* * * * *

また、ゆうさんにとって、あいさんの言葉は、どれほどのものであっただろうか。きっと、何ものにも代え難い、「安心感」のようなものを感じたのではないと思う。これまで私は、ゆうさんの持っている力を引き出してあげたい、きっとゆうさんならできるはず・・・という願いを持ちながら、日々成長を見守り、関わりを深めようとしてきた。ゆうさんが 安心して自己表現できるよう、決して、言葉ばかりを求めず気持ちを受け止められるように心がけてきた。

しかし、これまでの関わりを振り返ってみると、時に、私の思いが先走り「自分のお口で言ってみて。言葉で伝えて」と願いが先走ってしまう言葉掛けが、ゆうさんにとって、プレッシャーに感じることもあったのではないかと、私は今感じている。

* * * * *

私たちは日々の保育の中で、子どもたちに、たくさんの言葉を掛けています。そこには、先生としての、願い・思いを込めた意図的な言葉掛けがある。しかし、今回のエピソードを通して、願いを持った言葉にも、必ず子どもたち一人一人の育ちや

その時、その言葉を聞いた、ゆうさんの目からは、さらに大粒の涙があふれていた。しかし、私には、ゆうさんのその涙が、少し気が楽になった安心感の涙のように感じられた。

その日の帰りのバスの中で、私は、あいさんに、「ゆうさんの気持ちをわかってくれてありがとうね。ゆうさん嬉しかったと思うよ。」とお話をする、と、「だってわかったもん。あいも一緒だったから」と、返事が返ってきた。

姿を照らし合わせ、心に寄り添った言葉掛けが大切なのだと感じた。

子どもたちは、決して私たち保育者の言葉掛けだけで育つわけではないと思う。子どもたちの言葉は、その子のこれまでの経験の上に立ち、出来事を素直に受け止め、心に感じたそのままを表現しているように感じる。だから、今回の同じ「思い」でも、あいさんのように、ただ素直に相手を思う気持ちを表現した言葉だからこそ、きっと心に響くのではないだろうか。

今回、あいさんが、ゆうさんの姿、保育者の言葉を受けて、自分の経験と友だちの経験を重ね合わせて、ここまで共感していけた事は、本当に素晴らしい事だと改めて感じる。

子どもの言葉によって、友だちの心が動き、子ども同士で心を紡ぎ合う、そんな姿を今後も大切にしていきたいと感じる。そして、子どもたちが、思いを言葉で表現できるようになるためには、生活の中に「安心感」があることだと感じた。

ゆうさんの、今後を見つめていくことが必要ではあるが、少なくとも、あいさんにとっては、年中児の時の、「安心感」が、今回の言葉を生み出したと感じている。そして、きっと、今回のあいさんの発言は、ゆうさんにとって、大きな安心感を与えたはずであり、自分の気持ちを代弁して、みんなに伝えてくれた、あいさんの存在はとても大きかったように感じる。今後の、ゆうさんの成長が楽しみである。



園内研究会を通しての学びとまとめ

◆ エピソードを通した学びから

エピソードに触れながら、私たちは、子どもたちとの生活の中で、子どもの心に秘められた思いや、気持ちの揺れ動きを大切に受け止め、言葉や態度として表現するに至るまでの過程に、丁寧に寄り添い、保育者や周りの子どもたちが、互いの気持ちをどのように受け止め、その受け止めによって、子どもたちの心が、どのように変容し、成長していくかを、ゆっくりと読みほぐしていくことの意義を学ぶことができた。

【3歳児エピソード】

3歳児のエピソードでは、この2人の双子の女児は、当然ではあるが、これまでも同じ環境でお互いが、かけがえの無い存在として、ごく自然に支え合う存在であったと考えられる。

だから、保護者と離れ、不安との出逢いから始まる「初めての幼稚園」という社会生活では、支え合う2人にとって、それ以外の存在は、きっとなかなか受け入れ難かったはずであり、そこに親以外の大人である保育者が、風穴をあけていく事に、少々時間をかけていくことは、むしろ必要な事だったのかもしれない。

保育者は、自分自身のもやもやとした 気持ちと向き合いながらも、ゆっくりとしたペースで、“2人を知りたい、2人にかかわりたい”という思いで、ありのままの2人の存在に丁寧に接している。そして、ごくごく小さな出来事に一喜一憂しながら、毎日の生活を大切に紡いでいった様子が、一つひとつのエピソードを通して伝わってきた。

◆ 研究会を通した学びを深めて・・・

「わかる」って？ ～ 紡ぎ・紡ぎあう中から生まれる安心とは ～

園内の保育者で、テーマにある

「わかってもらえる」の「わかる」の意味を改めて考えてみた。

今回、多くの保育者が、3歳児の一つひとつのエピソードに出逢っていく過程に、心を動かされた。

何故なら保育者が、一生懸命になって子どもの気持ちを「わかりたい」と願い続け、焦る自分自身とも葛藤しながら、ゆっくりとしたタイミングで子どもとの関係を紡いでいく様子を、沢山感じる事ができたからである。

子どもは、言葉ではなく、互いに握った手の感触を感じたり、“私だよ”って言わんばかりに名札を必死に見せたり、少しずつ友だちへの関心を示したりして、必死に自分の思いを伝えている。

そして、保育者は、その瞬間の子ども気持ちを推しはかり、それを自分自身の感性で丁寧に汲み取りながら、子どもとの生活を紡いでいる。

これらの様子に触れたとき、子どもと保育者から、嬉しさや不安や高まる気持ち等々を「分け合う」

そして、保育者と接していく中で、2人の女児も又、少しずつその思いを受け止め、保育者との心を、ゆっくり紡ぎはじめ、2人なりの方法で、保育者に対し気持ちを寄り添い始めたのではないかと感じる。このような、心と心を紡ぎ、育んでいく過程に触れたとき、この時期の、その時間の大切さを大きく感じるとともに、ゆっくりと時間をかけて生活を紡いでいく保育の必要性を改めて感じる事ができた。

【5歳児エピソード】

5歳児のエピソードでは、「安心して心が寄せられる」という4歳児での経験から、友だち同士で気持ちを分かちあっていく、5歳児ならではの成長を感じることが出来た。

「くやしい涙」という言葉から、ゆうさんの涙が「安心の涙」に感じたという保育者の気持ちも大切に受け止めたい点であり、子どもと子ども、子どもと先生が、信頼関係を構築していく根っこは、こうしたお互いの気持ちに寄り添い、推しはかりながら受け止めていくことだと感じた。

また、先を見て、そして先を考える知恵が大人にはあるからこそ、“今”の気持ちが置き去りになってしまう保育者自身の姿に、自ら気づくことができたのも大きな意味があった。「だってわかったもん」という言葉に、純粹に受けとめ表現できるからこそ、気持ちが素直に寄り添い合える、子どもならではの魅力に、改めて接することが出来た。

という「分かる」が生まれたのではないかということを感じた。

子どもの心を「理解（解る）」したり、「判断（判る）」したりするのではなく、子どもと気持ちを「分け合った」からこそ、心の扉が動きだし、様々な気持ちを、その子なりの方法で伝え始めたのではないかと感じる。

このことは、5歳児のエピソードでも感じられる。同じ「悔しさ」を感じたであろう、2人の女の子が、気持ちを「分け合えた」ことによって、心の紡ぎ合いが生まれた。このことによって、きっと、保育者や第3者だったら、決して分からない、「だってわかったもん」という言葉が生まれたのではないだろうか。

きっと、「気持ちを分け合う」という行為が、お互いの心を紡ぎ・紡ぎ合う中から育まれる「安心」というものを、生み出すのだと思う。

最後に・・・

本研究を、エピソード記述を用いて取り組んだことにより、書き手である保育者の気持ちと、思いを表現しようとした子どもの気持ちを、園内全職員で読みほぐしながら、保育に対する願いや思いを共有出来たことに大きな意味を感じている。「人が思うことは誰にも止められない」という今村先生の言葉をいただき、経験年数に関わらず、その保育者の感じたことを、お互いが素直に受け止め、認め合い、そして自由に語り合うことが出来たのも、その一つである。

又、私たちは普段、一人の子どもについて、自分の知りうる限られた情報の中で、子どもをイメージし生活をしていることが多い。だから、このように、一つ一つのエピソードを読みほぐしていく事で、その子どもの事について、多くの保育者が情報を深く共有し、見る視点や感じ方をより豊かにすることが出来、とても大きな意義があった。

保育者自身が、自分の経験と照らし合わせながら、それぞれの立場からの学びを紡ぎ、保育に対する願いを保育者間で紡ぎ合い、分け合えたことが、今後、子どもに接していく保育者の心の豊かさや、それを共感しようとする力に繋がるのではないかと感じた。

『 紡ぎ・紡ぎあう 心と心 ～わかってもらえる安心感～ 』

心と心を紡いでいく営みは、お互いが心を寄せ、気持ちを推しはかりながら、心と心を分け合うことから始まり、そして育まれていくのではないかと実感している。

子どもたちが、お互いの心を寄り添い合い、共感し合い、そして心を分け合っていく生活の先に生まれてくるものが、「安心感」であるとするならば、私たちは、たっぷりとその時間をかけながら、ゆっくりと生活を紡いでいく保育を大切にしたいと思っている。

きっと、そのことが、これから人と人との間で、様々な思いを紡ぎながら成長していく子どもたちにとっての、豊かな心の育ちの大切な原点になると確信するから・・・。



『せんせい！ いちばんきめて』

～ 「ぼく、いちばんだよね？」 ～

4歳児 武藤 はるき (仮名・男児)

背景

はるきくんには、年齢の近い兄弟（弟：当時3歳妹：当時1歳）がいる。またその為に母親、父親が十分な時間を割いて、はるきくんと関わっていないことで、はるきくん自身が、我慢することが多く、今まで十分に、両親に甘えてこられていないという実態がある。

基本的には、何事にも一生懸命取り組む姿が見られる。表現力はとても豊かで、特に製作等では、自分の体験を絵などを通して豊かに表現していく力をもっている。生活面でも、事の善悪をしっかりと判断できる力をもっている。しかし、進級当初は、私に甘えたい、自分に注目して欲しいという事から、いけないことだとわかっている、歯止めがきかず、友達や物に対して、いたづらをする姿が見られた。

また、「初めての活動への不安」「緊張」から、進級当初は活動の導入中に、「えー僕やりたくない!」と、活動に対して意欲のない言葉を口にすることが多く見られた。しかし、その言葉の裏側を感じ、「やりたくない」の言葉に対し、「はるきくんならできるよ。大丈夫」等、背中を押すような言葉を掛けたことにより、はるきくんから、「やりたくない」の言葉が少しずつ聞かれなくなり、はるきくんの本当の気持ちを聞くことができるようになってきた。

(資料①参照)

(資料①参照)

* * * * *

そして、それ以降、「やりたくない」の言葉は、聞かれることはあっても、それに対して後押しの言葉を掛けていくことで頑張れる姿があった。しかし、時には、強く自分の思いをぶつけてくれる時もあり、ある日の、発表会に向けての活動で、「楽器遊びはやりたくない」と、頑なに思いを伝えてきた時があった。私は、この言葉に対して、その時は、はるきくんの思いをそのまま受け止めた。この経験が、その後のはるきくんにとって「気持ちを表現する→受け止めてもらう」「受け止めてもらった→僕も受け止めよう」という心の変化に繋がった。

(資料②参照)

(資料②参照)

* * * * *

はるきくんの様々な思いが詰まった言葉に対して、注意ばかりでなく、はるきくんの良いところも認める事。そして、時には、はるきくんの言葉の裏側を感じながらの関わりによって、徐々に心の変化が見られるようになってきた。

そうする中で、徐々にはるきくんが、私に甘える姿が増えてきた。一生懸命頑張って活動に参加したはるきくんに対し、「ギュッと抱きしめて褒める」という関わりを続けてきた。それが、自然とはるきくんの中で「頑張ったら抱きしめてもらえる」「甘えられる」という喜びに変わり、はるきくん

自身からも「頑張ったらギョ？」と私に対して、確認したり、求めてくる姿が見られるようになった。

エピソード

月刊絵本を使った活動をやっていた日の出来事。
3月の月刊誌には、ネズミのお引越しという題材で、ネズミの親子や、お家の家具を自分で考え絵本に貼っていく（ネズミの親子・家具はシール）というお楽しみがついていた。活動を始め、どの子も思い思いの場所に、ネズミの親子や、家具を貼っていた。活動中、シールの台紙を絵本から外す際に、怪我をした子がいて、私は事務所に絆創膏を取りに行った。すると、はるきくんがその後を追いかけてきた。はるきくんの手には月刊絵本。シールを貼ったページを隠すように胸に抱えて、あと追いかけてきた。

私は、はるきくんが出来たものを私に見せに来たのだと感じ「できた？みせて！」と声を掛けた。しかし、はるきくんの答えは「見せないよ」であつた。「なんで見せてくれないの？見たいな」と声を掛けると、「だって約束守ってくれないもん」と返ってきた。【約束とは、頑張ったご褒美で抱きしめてあげるという、はるきくんと私の中の約束である】私は、「はるきくんが頑張ったのが分かったら、いっぱいギュしてあげるよ！」と答えた。そんな会話をしている間に、私は事務所に着き、一旦はるきくんと離れた。そして事務所から出た途端、「はい」とはるきくんが絵本を見せてくれた。私はその場にしゃがみ、はるきくんの貼ったネズミのお家を見て話を聞いた。私は「すごいね、はるきくん！素敵に貼れたね」と声を掛けた。すると、はるきくんが「全然すごくないもん」と答えた。その場には、私が事務所に入っている間に集まってきた数人のたんぼぼ組の子ども達がいた。私はその言葉に対して「すごいよ！ね？みんなすごくない？」と周りの子どもたちに問いかけた。すると、みんなから「すごい、すごい」との声が出た。その反応に、はるきくんも満面の笑みを浮かべたので、私は「よし、じゃあこれみんなに見せてあげよ！」と声を掛け、クラスに戻るよう促した。

はるきくんを追いかけ、部屋に戻ると、はるきくんは部屋の前に置いてあったピアノの椅子の上に立ち、月刊絵本を見せていた。ザワザワしている保育室。クラスの子は、思い思いに友だちと話をしていました。はるきくんを追いかけていくクラスの子は、はるきくんが椅子の上に立ちみんなに絵本を見せる姿に驚いていた。いつもであったら、ピアノの椅子に勝手に立ち上がれば注意をしていたが、今回は、はるきくんの思いを受け止めたいと感じ、そのままはるきくんの横に立った。みんなに、

はるきくんは、注目してくれるように声を掛け、はるきくんが話せるような環境を作った。

自分の貼った家具や、ネズミの親子。貼った場所・理由を照れながらもみんなに発表していた。そんな姿に、私は約束であったギュをみんなの前でした。「頑張ったね」そう言って抱きしめると、嬉しそうな笑みを浮かべ、席に戻っていった。

その後も何人かの子に発表してもらい、活動のまとめをしようと話をし始めると、はるきくんが「先生、1 番頑張った子誰？」と問いかけてきた。私は、どの子も頑張っており、今回はみんなを褒めてあげたいと思っていた為、「みんな頑張ってたからなあ、1 番は決められないよ」と答えた。すると「1 番決めて」と強く訴えてきた。

一瞬考えた私は、みんなに「絵本を見せて」と声を掛け、じっくりみた。そして、「1 番決めた！けど、全員顔をかくしてくれない？1 番の子の頭に先生、タッチするね」と声を掛け、絶対にこちらがいいというまで頭を挙げてはいけない、話してはいけないと言う約束をした。そして、全員が顔を隠した姿を確認し、私は全員の頭をタッチした。そして、「頭挙げていいよ、さあ、この中に 1 人だけ頭をタッチされた子がいるよ。でも今日は秘密。タッチされた子だけが知ってる、秘密。」と言って、より 1 番に選ばれたことへの喜びを感じられるように配慮した。頭を挙げた時のはるきくんは勿論、クラスの子の表情は喜びでいっぱいであった。

すると、「じゃあ、その子を発表して。みんなに教えてほしい」と、はるきくんから、そんな言葉が聞かれた。「今日は発表しないよ」と伝えたが、はるきくんは「みんなに教えたい」と強く訴えていた為、1 番だった子は、「山本先生（その場に同席していた保育者）にこっそり教えてあげて」という事にし、ほかの保育者にも、こっそり自分で伝えても良いことにした。

活動が終了し、はるきくんは私の所にやってきた。何も言わずに甘える姿に「よかったね、1 番だったよ。」と告げると、「みんなに言ってほしかったな」という言葉が返ってきた。

はるきくんのそんな姿に「山本先生にこっそり教えてきたら？」という、その先生の所に行って、コソコソと内緒話を始めた。そして、また私の所に戻ってきて、嬉しそうに甘える姿があった。

■ 省 察 ■

はるきくんの「1 番決めて」という言葉の中には、「自分を認めてほしい」という気持ちが多く含まれていたように感じる。それに対し私は、今回、あえて全体には公表しない代わりに、それぞれの子が「自分が 1 番」と思えるかかわりを選んだ。

みんなの前で、それぞれの 1 番頑張ったところを認め、誰と決めなくても「自分も 1 番」「みんな 1 番」と個々が思えるかかわりも、方法としてはあったかもしれない。しかし、はるきくんの育ちの中で、現在は、この方法を取ることで「1 番になる」という気持ちが満たされると思い、このようにした。

はるきくんは、今まで、自分の思いを素直に言葉に出せていなかったと思う。思いとは違う言葉・行動により、注意を受けることも多く、認められることが少なかった。しかし「認められる」という経験をすることで、私に対して心を開き始め、安心感を抱けるようになり、思いとは違った行動・言葉も減ったのではないかと感じる。そして、私に甘える姿が多く見られるようになったのも、その現れの一つだと思う。そして、その甘えたい気持ちが現在、私に認められる喜びへと変化し、そこから更に「みんなにも認めてほしい」という気持ちへと変化しているのではないかと感じる。

様々な子どもたちの行動を見ていると、自分の思いを上手く表現できず、思いとは違った行動・言葉を発する子が、クラスの中に少なからずいるように感じる。では、何故そのような行動や言動をするのかと考えたとき、今回のはるきくんのように、自分がどのように見られているかが心配で、ありのままの自分を表現することに躊躇して、真逆の表現をすることで、自分自身を表現しているのではないかと感じた。

私たちが、行動・言葉にとらわれ過ぎ、その子自身の裏（本当）の思い、そして、その中で頑張っている姿、一生懸命な姿を見逃してしまう事で自分に自信を持つという、大きな心の育ちを失わせてしまう事があるのではないかと今回気づくことができた。

思いが上手く表現できず仲間との生活が出来ない等の行動はあっても、そのありのままをしっかり受け止め、その子の良さをしっかり認めることで、自分を見てもらっている安心感が得られると思う。そして、その子の育ちを感じ、裏（本心）の気持ちを読み取ることで、自分を理解してもらっている安心感が感じられるのだと思う。これらのことで、自分で自分を肯定的に受け止め、自信をもって生活出来ることに繋がるのではないかと感じた。

はるきくんは徐々に保育者だけでなく、周りの友達からも認められたい気持ちを感じ始めている。自分自身の良いところも、良くないところも全て受け入れてもらい、認められることで、自らが発する言葉を始め、様々な行動に変化が見られ、自分の良さを認められたいという「1 番決めて」という言葉に繋がっていったのではないかと感じる。

このことは家庭での生活でも大切なことであり、認めてほしい一番の存在であるはずの両親に、たっぷり甘えられる時間の保障が得られるよう、保護者に対しても積極的に働きかけていくことが必要であると思っている。

今回のエピソードを通して、安心して自分を表現できる場をつくることの大切さを感じるとともに、表出される言葉や行動を、心の変化と同時に読みとっていくことの必要性も感じる事ができた。子どもたちの心の声に耳を傾け、一人ひとりを認めていける保育を心がけていきたいと思う。

【資料①】

「ぼく、やりたくない」

■ 背景 ■

以前から活動の導入中、「えー僕やりたくない！」と、活動に対して意欲のない言葉を口にすることが多かった。それに対して、私はどこか、それは「はるきくんのわがまま（甘え）」と捉えているところがあった。私はその言葉に対し、「そっか、じゃあやらなくてもいいよ」や「じゃあ、はるきくんのしたいことをして待ってて」と声を掛けていた。それは、その事を言う、はるきくんの表情が笑顔で、活動が始まってしまえば意欲的に活動をしてくれるのを知っていたからであった。そして、私自身、はるきくんの「やりたくない」は、表面上の言葉と感じていて、その為、はるきくんの「やりたくない」という、その場の気持ちに、まずは寄り添おう、共感しようと思っていたのであった。

■ エピソード ■

はるきくんの「やりたくない」は、毎回聞かれるわけではなく、年中になって初めてやる活動（ピアノ・太鼓・パチあそび等）の時に、特に聞かれることが多い事に、気づいた私は、この日、はるきくんの言葉に対しての対応を変えることにした。

はるきくんの「やりたくない」の言葉に対し、「大丈夫だよ、はるくん。はるくんなら、できる」と背中を押すような言葉を掛けてみた。すると、いつもであったらニコニコ笑って再度「やりたくないもん」と言葉を発するはるきくんが、

首をかしげて、少しだけ笑みを浮かべて私のほうを見ていた。それに対し私も笑って、2度うなずいて見せた。その後、はるきくんの口から出た言葉は、「だってわからんもん」であった。私が「大丈夫だよ、どうしても分からなかったら一緒にやってあげる」と声を掛けると「えー」と言いながらも、照れくさそうに笑っていた。そして、その後、私の「ね？」という言葉に、何も言わず頷いてくれた。

■ 省察 ■

私の関わり、そしてはるきくんの姿の変化から、「やりたくない」の裏側にあったのは、「初めての活動への不安」「緊張」であったのだと感じた。活動をする姿を通して見てみると、甘えも含まれていると思うが、心の根本には、「不安」「緊張」があったのだと思う。

はるきくんの「だってわからんもん」の言葉を聞いた瞬間、私自身に、肩の力が抜けるような安心感が生まれた。

「はるきくんの思いに気づいてあげられたのかな」そんな思いがあった。きっと、はるきくん自身もそうであったと思う。実際に、この後は、何度かやりたくないの言葉が聞かれたが、今回のようなやりとりをしたことで回数も減り、今では全く聞かれなくなった。言葉1つ1つの内にある思い。それを読み取ることの大切さを感じた。

【資料②】

「つぎはがんばるよ」

■ エピソード ■

2月、発表会に向けての取組みをしていて、当日まであと1週間となったある日、登園したはるきくんの口から、最近では聞かれなくなった言葉が聞かれた。私が、登園したはるきくんに対し、「今日はこれからホールで、楽器遊びをするよ」と伝えたと「え、やりたくない」という言葉が飛び出した。今回も「大丈夫だよ！毎日のはるくん頑張ってくれてるもん。できるよ」と声を掛けた。しかし、その日は、その言葉に対しても、反応が変わらず、表情を曇らせて私を見ていた。今日は、少し違うなと感じた私は、はるきくんに対し何故やりたくないのか聞いてみた。すると「毎日楽器ばかり。何で最近、

折り紙とか、お絵かきとかしないの？」と私に訴えてきた。その言葉に対し、発表会に向けてみんなで心を1つに頑張っていきたいことや、当日お家の方に頑張っている姿を見せられるように練習をしていること等伝え、活動に対しての意欲を促していこうとした。しかし、1度やりたくないと感じた事に対して、なかなか簡単には気持ちを切り替えることは難しく、頭の中では状況が理解できていても、それを気持ちの中で消化するまでには、時間がかかるという気持ちを感じたので、今回は、はるきくんの思いを十分受け止めてみることにした。「よし、じゃあ今日はやらなくてもいいよ。でも、お部屋の中に1人は寂しいよ。一緒にホールへ行って、見ていようか」そう声を掛け

しかし、はるきくんの中では、もうホールにも行きたくないという気持ちを抱いていて、私も、その気持ちに寄り添いたい気持ちはあったのだが、一人クラスにおいて行くこともできず、又、何かのきっかけで活動に参加できたという葛藤もあり、困っていたところ、そこに、普段からたんぼ組に個別援助として入っている保育者が声を掛けてくださり、私は「今日は、はるきくんの思いを十分に受け止めてほしい」と伝えて、はるきくんと、その保育者を残し、ホールへと移動した。

* * * * *

【以下、その保育者からの報告】

その後、はるきくんと保育者は保育室に入り、お絵かきをしようと準備していた。しかし、その日は、年中組の保育室を年少さんが使うことになっており、はるきくんがいる保育室にも、年少さん1クラスが入って来た。保育者は、はるきくんに「ねえ、はるくん。年少さんいっぱい来たよ！先生なんか、ここに、はるくんと2人で居るの恥ずかしいよ。恥ずかしい、恥ずかしい！」と言って、テラスに逃げ出した。はるきくんもそれに対し笑顔で答え、一緒にテラスに出た。そして、表情が柔らかくなったはるきくんに対し、「どうする？お部屋にもいられないし…。ホールへ行ってみる？」と聞くと、「うん」と言って、さっきとは違った反応を見せた。

しかし、ホールでは、すでに活動が始まっている状態で、はるきくんにとっては、とても入りにくい状況であった。ホールの扉は閉まっていた、その扉の前で、また表情が曇り始めた。保育者も、その姿に気づき、一旦開けた扉を閉め、はるきくんと扉越しに年中さんの楽器演奏を聴いていた。そして、はるきくんの表情が落ち着き始めた頃を見計らい、「先生、中でみんなの演奏聞いてこよかな。はるくんはどうする？」と声を掛けた。すると、「行く」と答え、保育者と2人でホールの中に入ってきた。

【以上】

* * * * *

ホールに入ってくる姿を見て、私自身は、ほっとした。保育者の膝に座りながらも、みんなの演奏を聴き入れ、表情は落ち着いてみえた。あえて、私は何も声を掛けずに見守ることにした。すると、ピアノの時には、自分の場所に行き、何もしていないが立って参加している姿があった。そして、その後の楽器遊びは、楽器を持ち、一緒に演奏する姿も見られた。

活動が終わり、保育室へと戻ったはるきくんに対し、「先生嬉しかったよ！楽器やってくれたんだね、すごい！」と声を掛けた。それに対しはるきくんは、「でも、ピアノはやれなかったからすごくないよ。」と答えた。「でも、楽器をやってくれたことが先生は嬉しかったんだよ。じゃあ、次はピアノも頑張れそう？」と聞くと、「うん」と頷き、それに対して私のはるきくんと抱きしめ、喜びを伝えた。

省 察

「やりたくない」という言葉に対して、後押しの言葉を求めていたのははるきくん。しかし、今回は違っていた。そこには、毎日の活動に対しての、自分の思いをぶつけてくれたのだと思った。

この出来事の1か月前「いづみ中央幼稚園にとっての心の豊かさとは」という話し合いから、「自分の思いを何らかの形で表現できる事であり、保育者がそれに対してどう答えていくかで、その後の豊かさへ影響してくるのでは？」と私たちなりに考え、自分の保育を見直していた。

その事もあり、今回ののはるきくんの言葉を、私は「わがまま」「甘え」と捉えるのではなく、「自分の思いのままをぶつけてくれた」「表現してくれた」と受け止め、その思いを大切にすることができた。

しかし、この日は、学年の活動を進めていく立場であった為、そんな、はるきくんにじっくりつき合うことが出来ず、申し訳なく思っていたのだが、普段から関わりのある別の保育者が、しっかりと受け止めてくれたことで、徐々にやりたくなかった気持ちも落ち着き始めたのだと思った。

結果としての振り返りになるが、接する大人がかわることで、はるくんにとっても、気持ちを切り替える「間」がつくれたのではないかと感じた。日々の生活の中で、保育者と子どもとの、お互いの「間」を大切にしたいと思った。そして、普段から関わってくださる担任以外の先生（大人）の存在の重要さも併せて感じた。



